
天然と野獣

真田つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然と野獣

【Nコード】

N00250

【作者名】

真田つかさ

【あらすじ】

中3になったばかりの猪島利佳子。天然でドジだけど真面目で成績優秀。欠点は恋をしたことがない…。ある日、天然・大熊浩也の一言で利佳子は恋に落ちてしまった。

ボケ10点

少し肌寒さが残る4月。

中学最後の遠足から帰っている途中だった。

「わっ！」

3年生、猪島利佳子いのしまりかは倒れている看板を踏んでつまずいてしまった。ボーっとしていて、気づいたらそうなったようだ。

「ははっ、ボケ10点」

「それ何点中ですか？」

「10点中！」

利佳子はドキドキした。

西鳥達紀にしどりたつきと大熊浩也おおくまこうやに見られてしまった。心臓が早鐘を打っている。達紀は鼻でくすつと笑っていたが、浩也はおもしろかったようで、

「ボケ10点」とまで言っていた。

この日から、利佳子は浩也のことが気になるようになっていた。

しかし利佳子は人を好きになっただことがない。だから、利佳子はこのドキドキが何なのかわからなかった。ただ、一つ思ったことは、
「今のはボケたんじゃない…」ということだ。それでも利佳子はボケという言葉に妙にドキドキしたのであった。

鈍感利佳子

「利佳ちゃん？」

「はっ」

利佳子はボーっとしていた。

今のはなるせ（犬井^{いぬい}なるせ）だ。

「何…？」

「ボーっとしてたね」

利佳子はそのまんま言われた。このとき、利佳子は浩也のことを考えていた。浩也は何故利佳子にボケと言ったのだろうか。看板を踏んでしまったのは踏んでしまったが、利佳子にはわからなかった。しかし、浩也のことが気になるのは確かだった。こんなにも人を考えたことは利佳子にはなかった。そう、すなわち恋なのであるうが、利佳子は鈍いうえに恋心を抱いたことがない。しかし、なるせは感づいたようだった。

「利佳子！」

「うわぁ！」

利佳子はまたボーっとしていた。

「あんたボーっとしすぎ！」

「ごめんなさい…」

なるせに怒られたところで、なるせが利佳子に尋ねた。

「利佳ちゃん、なんかあった？あ、だれか好きな人のこと考えてたんだ！そうでしょ！？」

利佳子は少し間をおいて答えた。

「好き…？って何が？」

なるせはマンガのようにずっこけた。

「あのねえ、あんた中3でしょ！？好きくらいわかるでしょ！」

「うん！私チヨコが好き！」

なるせは利佳子のおでこにデコピンした。

「ちがーう！人のことだよ！利佳ちゃん今だれか男の子のこと考えてたんじゃないの？」

「よくわかったね」

「え！だれ、だれ！？」

なるせは興味ありそうに利佳子に尋ねた。

「うん、大熊くんのこと考えてた」

「そうなんだ。利佳ちゃんは大熊くんが好きなんだ。知らなかった」

「え？好きって何？」

「だあかあらあ！大熊くんでしょ？」

利佳子は人差指でおでこをおさえた。

「人を好きってどういうこと？」

「うーん、利佳ちゃん人を好きになったことないの？」

「うん」

「簡単にいうと、特定の男の子のことばかり考えちゃうわけ。いやなことじゃなくて、なんかこう、ドキドキするんだよ」

「うん！今ドキドキしてるよ」

「やっぱり。利佳ちゃんは、大熊くんのことが好きなんだよ。わかった？」

「そうか、私は大熊くんのこと好きなのか」

腕を組み考えている利佳子を見て、なるせはため息をつくように笑った。

胸の高鳴り

なるせと話してから、利佳子は浩也を見かけるたびに恥ずかしさがこみ上げてくるのであった。ほかの男子のときは抵抗はない。

「こういうことなの？人を好きになるって」

しかし、恥ずかしくなる分、うれしくもなるのであった。利佳子にとっては大きな一歩だったかもしれない。

利佳子は、浩也といわれたらどれほど幸せか、と想像していた。

もっとも、浩也という人物をまだ利佳子は理解していない。

まだ、利佳子は恋というもののさえも知らない。

なるせは、変なダンスをしている利佳子を見て、少し心配になるのだった。

修学旅行「準備」

利佳子たちの学校は、中3に修学旅行に行く。班は、男子と女子が均等に4人になるようにわけられる。ただ、人数の関係で利佳子は5人班だった。

班のメンバーが発表されたとき、利佳子はまさかの浩也と同じ班だった。

「やったじゃん」

なるせが言った。利佳子は「うん」と軽くうなずいた。しかし、心の中ではガッツポーズをして喜んだのだった。

「それはいいんだけど利佳子ちゃん…。あんた私とも同じ班だよ？」
利佳子は持ち前の天然さで笑ってごまかしたのであった。

修学旅行の具体的な日程は、1日目が奈良、2日目は班で京都内で自主研修、3日目は楽しみなテーマパークだ。

テーマパークも楽しみだが、利佳子は班での自主研修も楽しみだった。もちろん、浩也となるせがいるからだった（ちなみにあと2人は男子の四猫衛よねこまゑと女子の馬田秋つまたあきだ）。

「私、ここ行きたいな」

馬田秋は地図を指差して言った。

「何々…六道珍皇寺？」

「……………」

班のみんなの空気が固まった。

大熊「下ネタ」

四猫「もう一回言って？」

馬田「そうなのよー、ここはね…」

みんながいろいろ意見を言ってくる中、馬田秋は語り続ける。

利佳子は顔を赤くして誤解を解いていた。

「ちがうつ、ちゃんとそう書いてたの！別に好きでいったわけじゃ

ないもん」

「あつてるよ。読みがな書いてるから大丈夫だよ…」

浩也は一人笑っていた。

結局、六道珍皇寺に行く予定はなくなった。

利佳子にとって変な誤解を招いてしまったルート決めた。しばらく、利佳子は落ち込んでいた。

修学旅行「当日」

「いよいよ出発だねー」

「そうだね」

「あんたちゃんと寝たの？」

「寝不足だよー」

「バカじゃないの？」

今日は修学旅行だ。利佳子は眠たい目をこすりながら、なるせと話している。

「利佳ちゃん、頑張つてね」

「何に？」

なるせは利佳子の頭を小突いた。

「あんた本当鈍いねー。大熊くんに言うよ！いいの？」

「えっ、意味わかんないけどとりあえず言わないで…」

なるせは、浩也と何か良い進展があるように…、と本人には言わな
いが願っているのだ。これに本人は気付かないので思わず頭にきて
小突いてしまった。しかし、なるせはこの根っからの天然の利佳子
が好きなのだ。

『…大熊くんもこんな利佳ちゃんが好きなんだろうなー』
なるせは心でつぶやいていたのだった。

修学旅行1日目の奈良はクラス行動だ。法隆寺や薬師寺、利佳子は
とても感動していた。

「なる、見て！あれが法隆寺だよー！」

「そうだね」

「何？その反応はー！この壮かさ…」

「あんた、興奮しすぎ」

なるせに小突かれながら利佳子はパチパチ拍手しながら建造物を眺
めているのだった。

1日目の宿泊所では、利佳子になるせと同じ部屋だった。

「こら利佳子！早くしな！」

「待つてよー！」

「あんた子供じゃないんだからもとしっかりしなさい」

利佳子は「テヘヘ」とニコニコしながら部屋に入った。

「もうすぐご飯だね。服着替えとこう」

このときもうすでに利佳子は服を着替えていた。

「ちゃっかりしてるな」

なるせはため息をつくように言ったのだった。

修学旅行「2日目」

2日目は班で自主研修だ。

「利佳ちゃん。起きてる？」

「なんとか」

なるせは眠そうに立っている利佳子を見ていった。起きているのか寝ているのかわからない利佳子は、必死に眠たくなるのをこらえていた。

各班のタクシーに乗り込み、利佳子は熟睡した。

「利佳ちゃん、昨晚は一番に寝たのに」

なるせは独り言をつぶやいた。

それをきいていたのか、浩也がなるせに話しかけた。

「すげえな、俺4時まで西鳥くんとしりとりしてたから寝てねえ」

なるせは、そうなの！？と驚きながら、寝ている利佳子に小さな声でつぶやいた。

「利佳ちゃん、大熊くん、あんまり寝てないんだって」

なるせは利佳子のほっぺをつねった。

「ん…なんかあつた？」

「おはよう、はい、2回目」

利佳子はキョロキョロと見回した。

「もう着くよ。起きろ」

ほっぺを軽くつねられ、ようやく利佳子は目を覚ました。

「次は…金閣寺」

駐車場に車を止めて、歩いて金閣寺まで行く。

「うおー、ほんとに金…色だね」

「危なかったね、利佳ちゃん」

金閣寺を背に記念写真を撮った。

歩いている途中、浩也が言った。

「寝みー」

利佳子は思い切って話しかけた。

「大丈夫？」

これに、浩也は眠たそうに答えた。

「タベ西鳥さんと4時までしりとりしてた」

「すごいね…」

利佳子はあと少しだから頑張れ！と浩也の肩を叩いてなるせのところへ行った。

「よく話せたね、えらいえらい」
なるせは言った。

「えへへ」

利佳子は笑って顔を赤くしてうなずいた。

集合場所の東寺までのタクシーの中、前の座席に座っている男子二人は眠っていた。おもしろいことに、四猫は窓によりかかり、浩也は四猫の肩によりかかっていた。

利佳子はささずカメラを撮り、くすくす笑っている。

「あー、後で大熊さんに言ってやる」

「秘密秘密！」

利佳子は、なるせに口止めしながら前の二人を眺めていた。

修学旅行「3日目」

3日目は、みんな楽しみテーマパークだ。

「大熊くん、今日はきちんと寝たのかなあ」

利佳子は心の中でつぶやいた。

「わーーーーー、すごいすごいっ」

利佳子はテーマパークの入り口に並んでいた。

ジェットコースターはものすごい速さだ。

「なる、あれ乗ろうね、ね」

「はいはい」

オープンして、急いであのジェットコースターに向かう。

「ウギャッ」

転んだのはなるだ。

「大丈夫？」

利佳子は手を差し伸べる。

「大丈夫、利佳ちゃん、速すぎるって」

「ごめん、ゆっくりいこう」

と利佳子が言った瞬間、なるが、ものすごい勢いで走り始めた。

「バーカ、ゆっくりしてたら乗れないよ！」

「バカちゃーーーーー」

ようやくさっきのジェットコースターにたどりついたが、もう人が並んでいた。

「あちゃー、次かなあ」

なるが言うつと、なるの目線の先に

大熊くんと西鳥くんが並んでいた。

つんつんと肘^{ひじ}でつつかれ、

利佳子もなるの指さす方を見る。

「もしかしたらいつしょかもよ」

結局、前の人で最後で、

利佳子たちは次の次になってしまい、
いつしょには乗れなかったのだった。

帰りの飛行機の中。疲れて利佳子は
眠っていた。ほとんどの生徒は寝ていた。

着いてから、またも利佳子になるにつねられ起こされた。

「利ー佳ー子ー！あんたはよく寝るねえ！？」

「いでででっ」

利佳子は夢の中から引きずり出されて、
起きてからもしばらくポヤポヤしていたのだった。

修学旅行「まとめ」

修学旅行が終わったの連休明け。

みんなぐったりしている。

「みんなあ、疲れてるのはわかるけど

もう3日も休んだんだから元気出せよあ」

先生だ。白髪で男の小岩先生。

しかし、先生の言葉なんか頭に入っているわけがない。

昼休みにはほとんどの人が元気だったが、

5、6時限目の修学旅行のまとめの時間は、
もつと元気だった。

「わーたーしーは、ぎーんーかーくーじ」

「利佳ちゃん、声に出さなくていいんだよ」

「え、しゃべってた？」

「あんた、バカじゃないの？」

「うーん」

利佳子は、悩んだように首をかしげている。

しかし、気づけばもう感想作文を書き続けていた。

「俺は金閣寺とか行かなくて良かったな」

「もう、いまさらそんなこと言うなっ」

「だって、前に言ったことあるもん」

「あんた、それ行く前にも言ってたな？」

四猫と馬田が口喧嘩を始めた。

それを、利佳子が仲介した。

「まあまあ、四猫は金があるから……」

「……………」

班のみんなの空気が固まった。

大熊「下ネタ」

四猫「…」

「ちつ、違う…。よ、四猫の頭に金閣寺が…」

本当は、『四猫の頭に金閣寺があるから

行く必要はなかったかもね、でも

おわったから変なことというな』と

言おうとしたのだが、言葉が足りず

また変な誤解を招いてしまった。

（何をかくそう―隠すことはできないが、

四猫はつむじからはげている。

まるで河童かつぼのようだ。

実際、あだなは河童。

暑い日には、『水がないとひからびる』とか、

『河童寿司おごれ』とかからかわれている。

だから利佳子は、頭に金閣寺があると言いたかったのだ。）

そして、利佳子はまたしばらく落ち込んでいるのだった。

体育大会「団決め」

修学旅行も終わって、1学期も終わって…。

利佳子は夏休みに宿題をためて

夏休み最後の日まで泣きながら宿題をしたのだった。

そして、始業式。

「あれえ、利佳ちゃん、黒くなったね」

「なるは白いね」

なるの第一声は「おはよう」ではなく、

「黒くなったね」だった。

始業式の後に、団の色を決める。

利佳子たちの中学校では、

始業式からもう体育大会は始まっているのだ。

利佳子たちは、青団だった。

「また青かよお」

なるがつぶやいた。

「私は去年黄色だったから…」

利佳子たちの中学校では、黄色は嫌われ者だ。

だから、利佳子には青で十分よかった。

体育大会「練習」

利佳子たち3年生の学年団体競技は百足競走だ。むかできようそう
知っていると思うが、クラス全員が一行に並び、
息と足を合わせて前進していく競技である。

最初に男子が行き、次に女子が行き、最後は全員で行く。

「良い？みんなで声だすよー？」

「はい」

「声がちっちゃーい」

「はあ！」

応援団の副団長の猿田文えんだふみの指揮で
みんな一斉に前進する。

しかし、最初はうまくいかないもので、
ドドドッ…。

すぐに転んでしまう。

利佳子は一番後ろだから、前に引つ張られるのだが、
なぜか転ばない。

いつもは何もないところで転ぶ利佳子だが、
こういうときだけは本当にしっかりしている。

「行くよー、せーの」

転んでもあきらめずに練習をするので、
利佳子はだんだん飽きてきていた。

しかし、浩也も頑張っていると思えば
乗り越えることができたのだった。

そして、利佳子は意外にも足が速かった。

100mは全員走るのだが、
200mや800m、運命競争、リレーの4種は

クラス選抜でどれか1種目2名ずつ、リレーは、ほかの選抜に出ていると出られるということで、利佳子は200mとリレーを走ることになった。

「利佳ちゃん、応援してあげる。」

だからどっちも1位になるんだよ」

「うーん、自信ないなあ」

「そんなこと言っちゃだめでしょー!」

「じゃあ、なるは800mに出てね」

「ええ! って、文^{ふみ}ちゃん、まだ出るって決めてないよ!？」

応援団副団長の猿田^{えんだ}文が、利佳子たちの

話をきいていたのか、黒板になるせの名前を書き始めた。

「やったあ、なるも出るから頑張ろう!」

「って…。はあ。仕方ない。でるか。」

その代わり! 絶対1位とるんだよ?」

「はい」

利佳子は満面の笑みで手を挙げ喜んだ。

体育大会「準備」

体育大会前日。

利佳子たちは日曜日の体育大会に向けて

前日の土曜日に準備をしていた。

「せーのっ」

テントを立てながら、利佳子となるせは話をしていた。

「利佳ちゃん、最近大熊くんのこと何も言わないね」

「えー、うん。体育大会で疲れてるし…」

眠たいのか、利佳子は目をこすりながらしゃべっていた。

「そっか」

「体育大会が終わったらまた話すよ！」

「はいはい」

暑い中、利佳子は汗を拭^{ぬぐ}っている浩也を見ていた。

その時、利佳子と浩也は目が合った。

しかし利佳子とはつさに目をそらしてしまった。

「バカ！なんで目をそらすの！その時はね、

ニコって笑わなきゃだめでしょ？」

「だ、だってえ、目が合うなんて思わなかったんだもん！」

なるせに怒られながら目をそらしてしまったことを

後悔している利佳子であった。

体育大会「本番その1」

ファファールがグラウンドに鳴り響いた。

「最初は青団の入場です」

放送が鳴り、団長が叫んだ。

「青団、行くぞー」

「オー」

走って自分の所定位置について、

ほかの団も入場して、やっと開会式が始まる。

「これで、プログラム1番、

開会式を終わります。次はプログラム2番、

準備体操です」

準備体操と言ってもラジオ体操だ。

「これでプログラム2番、準備体操を終わります。

続きまして、1年男子による、100m競走です」

「続きまして…」

「続きまして…」

利佳子は、選抜200mに出場するため、
入場門に整列していた。

3年男子100m競走で、浩也は8人中5番だった。
背の順でいくから、ほぼ後ろのほうだ。

浩也たちの組は速い人ばかりだった。

浩也の5番はいい方なのだ。

利佳子は入場門に整列してたため、声を出して

応援することができなかった。

利佳子の出場する200mで、どんどん1年2年が走っていく中、利佳子は緊張ばかりしていた。

「…第4レーン、青団猪島利佳子さん」

利佳子のはつとしながら

「はい」

と手を挙げて礼をした。

「用意…パァン！」

ピストルの音が鳴り響く。

利佳子はほぼ無心で走っていた。

浩也は見ているか…なんて考える暇などもなかったほどに。しかし実際は考えていた。余裕だったからだろうか。

利佳子は1位でゴールした。

青団のほうから、キャーとかいいぞーとか歓声があがっていた。

「やったじゃん」

青団の応援席に戻って、なるせとあった利佳子は

「うん。なるも800m頑張ってたね」

「あー、それ問題だねえ。でも

利佳ちゃんが1位だったから、

それなりに頑張るよ」

「それなりって…」

なるは800mのスタート地点まで走って行ってしまった。
この時点で、青団の得点は4団中4位だった。

体育大会「本番その2」

午前の部プログラム11番全校女子の団体、棒引きが始まった。

青団は、練習ではいつも1番だった。しかし、本番はわからない。

「よい、バン」

ピストルがなつてから皆勢いよく飛び出した。

利佳子は走って棒のところまでいくと、引つ張り合うことなく自分の陣地に運んでしまった。

「先輩、速ーい」

青団1年の柔道部古永ここねだ。

利佳子は人気者だった。

実際、この体育大会だけで

たくさんの1年の後輩に好かれ始めた。

「キャー、先輩手加減してくださいよ！」

「赤ー、利佳子先輩が来たぞー」

利佳子はさすがに恥ずかしくて叫んだ。

「うるさい、やめれい！」

「キャハハハハ」

結局、女子団体は青団の優勝だった。

これで、だいぶ点数の巻き返しができた。4位から2位に浮上した。

体育大会「本番その3」

午前最後のプログラムは、

男女ともに苦手とするフォークダンスだ。

しかし、利佳子は浩也と踊ることができるので、
内心それほどいやではなかった。

入場行進の曲が流れ始め、

利佳子とパートナーは手を取り、

前に進み始め、前の人に行く。

徐々にきれいな円になっていく。

曲が鳴りやみ、オクラホマミクサーのポーズをとる。

チャララッチャチャララ♪

みんなが笑顔で（というかニヤニヤと）踊り始めた。

浩也までの間、ドキドキしていた。

浩也が来た！

しかし浩也と手を取った瞬間音は止んだ。

しかし、次のコロブチカがある。

それまでオクラホマミクサーのポーズをとったまままだ。
笛の音でコロブチカのポーズをとる。

チャッチャチャララ　チャッチャチャララ♪

コロブチカの曲が流れ始めた。

利佳子は赤面したまま浩也のあごを見ている。

目をあわせるのは恥ずかしいからだ。

浩也は利佳子とするときだけは顔をあげているのだった。

利佳子は気付くはずもなかった。

体育大会「本番その4」

午後のプログラム1番は組体操だった。
炎天下でグラウンドの砂も熱い。
しかしけが人が出ることもなく、
無事に組体操を終えた。

このあと、運命の百足競走…。
予行練習では1位を取った。
本番は絶対そうなるとは限らないが、
それでもとにかく頑張ろうと利佳子は
心に決めていた。

ピストルがなり、まず男子が走りだすと、
なんと青団は1位で女子にバトンタッチ！
男子の最後がスタート線をこすと同時に
女子も出発した。

いい調子だ。この調子なら1位は間違いない。
そう思った時だった。

「キャアアッ！」

前の方が転んでしまった。

「みんな早く立って！せーの」

猿田文の合図でまたに走り始めたが、
予行練習で最下位だった白団に

追いつかれてしまった。

スタート地点に戻り、男子の最後と女子の最初がひもを結び、委員長の

「せーのっ」

で出発した。

白団がもうUターンして、間に合わない。

しかし、黄団は青団とほぼ横並びだ。

Uターンして、ここからは最後の利佳子と

黄団の最後のゴールの速さで決まってしまう。

「押すからね!？」

利佳子は前の羽鳥陽はとりように叫んだ。

「いいよ! 押せ押せ!」

そんな心配もなかったかもしれない。

結局押したのだが、押さなくても

青団の方が若干速くゴールした。

青団は2位に終わったが、まだ紅団こうだんがゴールしていない。

まだ女子なのだ。

「紅団! 紅団!」

応援団長が応援 시작했다。

「紅団！紅団！」

青団のみんなが応援 시작했다。

応援をしていたのは青団だけだった。

紅団がゴールしてから、

紅団は全員号泣していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0025o/>

天然と野獣

2011年10月8日01時04分発行